

伝承が息づく港町・坂越

大避神社祭礼を受け継ぐ人々

坂越湾に臨む

赤穂市内の東に位置する坂越地区は、江戸時代中期に塩廻船業で海上交通の要として栄えた港町であり、現在は1994年から始まった護岸整備により美しい階段式の浜に姿を変えている。航海安全の信仰を集める大避神社は、港を静かに見守るように丘の中腹に建ち、そこにはかつての繁栄ぶりを今に伝える「廻船図絵馬」も多く残されている。



「坂越の船まつり」のようす
が残り、大
避神社では
その秦氏を
祭神として
祀っている。
今回はそ
の大避神社
を訪ねる。
神社の祭礼

浜辺から百m程の沖合には瓢箪のような形の「生島」があるのだが、その島には渡来人秦氏の伝説

は瀬戸内三大船祭りの一つで「坂越の船まつり」と呼ばれ、国の無形民俗文化財として選択されている。300余年続いていると言われる歴史ある祭礼を脈々と受け継ぎ、また守り伝えてきた大避神社生浪島禊宮司に坂越に生きる伝承をうかがった。

湾に浮かぶ神地

生島の周囲はわずか1.64km。そこには聖徳太子に任え聖徳太子没後、蘇我氏の迫害を避け逃れて来たたとされる秦河勝の墓所があるため、島は長く神聖地であり禁足



生浪島禊宮司

地とされてきた。そのため島全体に原始のままの樹相が保たれており、亜熱帯の密林を思わせるほど鬱蒼としている。坂越の町並みの背景にそびえる山の樹林とは相を全く異にすることが見てとれる。生島にはシイ・アラカシ・カナメモチ・センリョウ・モッコウなどの樹林が約190種類繁茂しており、大正13年(1938年)に国の特別天然記念物、そして国立公園特別保護区に指定された。生浪島宮司は、「この島の木を勝手に切ることは禁じられています。浅野内匠頭は島の木を切って赤穂城の建築に用いるという禁忌を犯したために、江戸城内で刃傷事件を起こし赤穂藩断絶につながった」という逸話も残っています」と話す。



周りには樹林が茂る



生島のお旅所

採を行って
いるのだ。
「多い時は
1万5千本
は筍を採り
ました」と
生浪島宮司
は苦笑す
る。悠久の
中であつて
変わらぬ姿を保つてきた生島にも
環境の異変という影が見えている
のかも知れない。

ボートを降り島のゆるやかな傾斜を登るとすぐに樹林が天上を覆い、薄暗い。途中青々と苔むした巨木が倒れており、その倒れた跡のすき間からは陽が届く。そうしてしばらく進んだ所に秦河勝の墓所があり、それは2本の石柱で御

幣がつるされ、地面の真ん中には大ぶりの丸い石が置かれていた。墓所の四方も木々に囲まれ、所々ツル科のムベが樹に巻き付いているのが見てとれ、島に満ちる植物の生命を強く感じた。

古の伝承を守る

坂越の浜辺に戻り神社のある方角を見ると、神社の真上の山腹には妙見寺観音堂の屋根が見える。明治の廃仏棄釈の折、大避神社もその影響を受けた。現在の生浪島宮司は4代目で初代は妙見寺の住職であったが、遺俗して宮司となったという。

神社の随神門に安置される像にもその名残が見られる。湾を向いて右大臣左大臣像が鎮座し、それらの背中合わせで本殿に向かって仁王像が建っている。神仏習合の証であるこれらは当初逆に配置されていたが、廃仏棄釈運動の影響



神仏習合のなごり、仁王像(左)と右大臣像(右)から一夜にして配置場所をひっくり返したのだという。更にその後合社令により、30近くあった大避神社の分社



大避神社境内が、現在までに半数に減っているらしく、時代の波に翻弄されてきた歴史の跡がうかがえる。

大避神社

は祭神として天照皇大神と春日大神、大避大明神(秦河勝)を祀り、現代も航海安全や厄除の神社として信仰を集めている。境内には先述した廻船図絵馬や、神楽の祖である秦氏を神として祀る東儀や林などの宮内庁楽家から絢爛たる絵馬も奉納されている。それらの奥には祭礼に使用される12隻の船の一つで現在は使用されていない楽船が置かれており、これを含む数隻が兵庫県有形民俗文化財に選択されている。船が海に浮かぶのは年一回、10月第二日曜で、それまで12隻は船蔵で時を待っている。祭礼当日の過疎化に伴い祭礼を担う人材が減り、かつての10月12日から人が集まりやすい第二日曜日に祭礼日に変更された。船の漕ぎ手など人材を募ることも大きな問題だ。また、昔は一升瓶を抱えながら祭りを行っていたのが、今では日本酒を呑まない上、食べ

物も煮しめのみだったのがラーメンやら唐揚げやら好みは様変わりしました」とも言う。それでもやはり祭礼当日、人々を乗せた12の和船が生島に漕ぎ出す様子は昔と変わらない荘厳さを伝える。

自然と対峙する祭礼

「以前は木村製菓(現在アース製菓)、ユニチカなど地元企業に勤める人がほとんどでした。坂越の祭ともなればそうした会社は休みになったものです」と生浪島宮司は当時を振り返る。

時代は変化し今の祭礼は地区保存会を中心として運営されている。しかしながら雅楽が鳴り響き獅子が舞い、雅楽の調べが流れる姿はその遷りいを感じさせない。

祭礼の日、神輿に御分霊を遷し、それぞれの町から選ばれた頭人達が一時間かけて神社から浜辺までの参道をねり歩き、そしてバタ板と呼ばれる橋板を船に掛け、神輿を乗せた、生島のお旅所に向かつて12隻の船が漕ぎ出される。權伝馬・獅子船・頭人船・楽船・神輿船・供奉船・歌船の計12隻。海上の神事ゆえに波を読むこと、操舵の技術など必須である。晴れていたとしても風が吹けば上陸は困難となるからだ。島に到着して祭典を終えると、日暮に篝火を焚い



県の有形民俗文化重要文化財「楽船」

て船は戻ってくる。坂越の祭礼は時代とともに遷りいながらも確実に受け継がれているのである。

独自の歴史と文化の町

坂越の船まつりは昭和51年(1956年)に発生した大水害と昭和63年(1988年)の昭和天皇御不例の際、以外は300年に渡り開催されている。神社の創建の時期は定かではないが、播磨の国総社縁起(1181年)の中に大避神



古くから残る和船の絵図

81年)の中



坂越の町並み

社と考えられる既述が残されていることから見て、その歴史は古い。神社を出て町に下ると大きな屋敷が残る古い家並みがある。江戸時代からのものだろうか、1992年市街地景観形成地区に指定された区域で、1997年には都市景観百選に選定された町並みである。中でも慶長年間から約400年続く造り酒屋で、大塩田主でもあり廻船業も家業とした奥藤家は、今も銘酒忠臣蔵を造り、また奥藤酒造郷土館として開放しており、貴重な資料が保存され、来館者は、かつて塩廻船業でにぎわった町にしばらくの間想いを馳せることができる。

道からも坂越湾が見える。東は室津、西は牛窓まで嵐の際には、坂越湾に船を泊めて難を逃れたという。坂越の町ではその穏やかな佇まいとともにこの地に残る伝統と、それを守っていく人々の息づかいを色濃く感じることができる。



2006年 No.26
マグネシア・ミュー

編集・発行

マグネシア リサーチ センター

〒105-0013 東京都港区浜松町1-9-10 ビリーヴA浜松町

TEL 03-5472-6675

FAX 03-5472-0261

(本誌記事等の無断転載・複写を禁じます)

The Sakoshi area exuding ancient tradition The festival at Ohsake Shrine and the people

The Sakoshi area is located east of the city of Aki. During the period of the Edo (1603-1867) this was a town which prospered through the salt production and salt shipping industries. Right now, however, the city has been transformed into a beautiful, quiet beachside area, as a result of a shore protection policy. As if watching over this scene, located amidst the mountains stands Ohsake Shrine, even now a center of religious faith dedicated to maritime safety.

Ikishima, an island lying in Sakoshi Bay, is an island where a person called Kawakatsu Hatano, a member of the nobility, is said to have arrived. He was especially beloved by Shotoku Taishi (574-622), a member of the nobility and a politician of Asuka Period. His grave still remains there, and there is a festival commemorating Kawakatsu Hatano. With Ohsake Shrine as a center, this festival is called the Sakoshi Boat Festival, and during the festival boats are rowed to Ikishima. This festival has been designated as a national intangible folklore cultural asset. We interviewed Mr. Takashi Inamijima, a priest at Ohsake Shrine concerning this festival which has been celebrated now for about 300 years.

Holy island floating on the Bay

The compass of Ikishima is only 1640m. The island has been a restriction place as a halidom, due to this, you can see pristine forest in the island and it has been designated as a Special Natural Monument in 1924. Inamijima priest speak that there is an anecdote that Takuminokami Asano, a Aki Lord committed a crime of cutting tree in the island, this lead to breaking off of the lord.

Preserve the traditions

The precincts of Ohsake Shrine dedicated picture offering which describe at the time of flourishing salt production and salt shipping industry and another picture offering of the music department of the Imperial Household Agency, which worships Kawakatsu Hatano as a father of Shinto music and dance numbers. You can feel the deep of faith. Back of the precincts, there is a boat which is designated as a Hyogo tangible folklore important cultural properties. The festival is held the second Sunday of October and 12 boats are rowed. The men with loincloth row a boat and perform the lion dance and blare the note of Japanese traditional music and dance on the boat. There is a great concern about depopulation of Sakoshi area, due to this people who row a boat and memory keeper are getting less and less. People who stay in Sakoshi cherish the festival to tell the traditions.